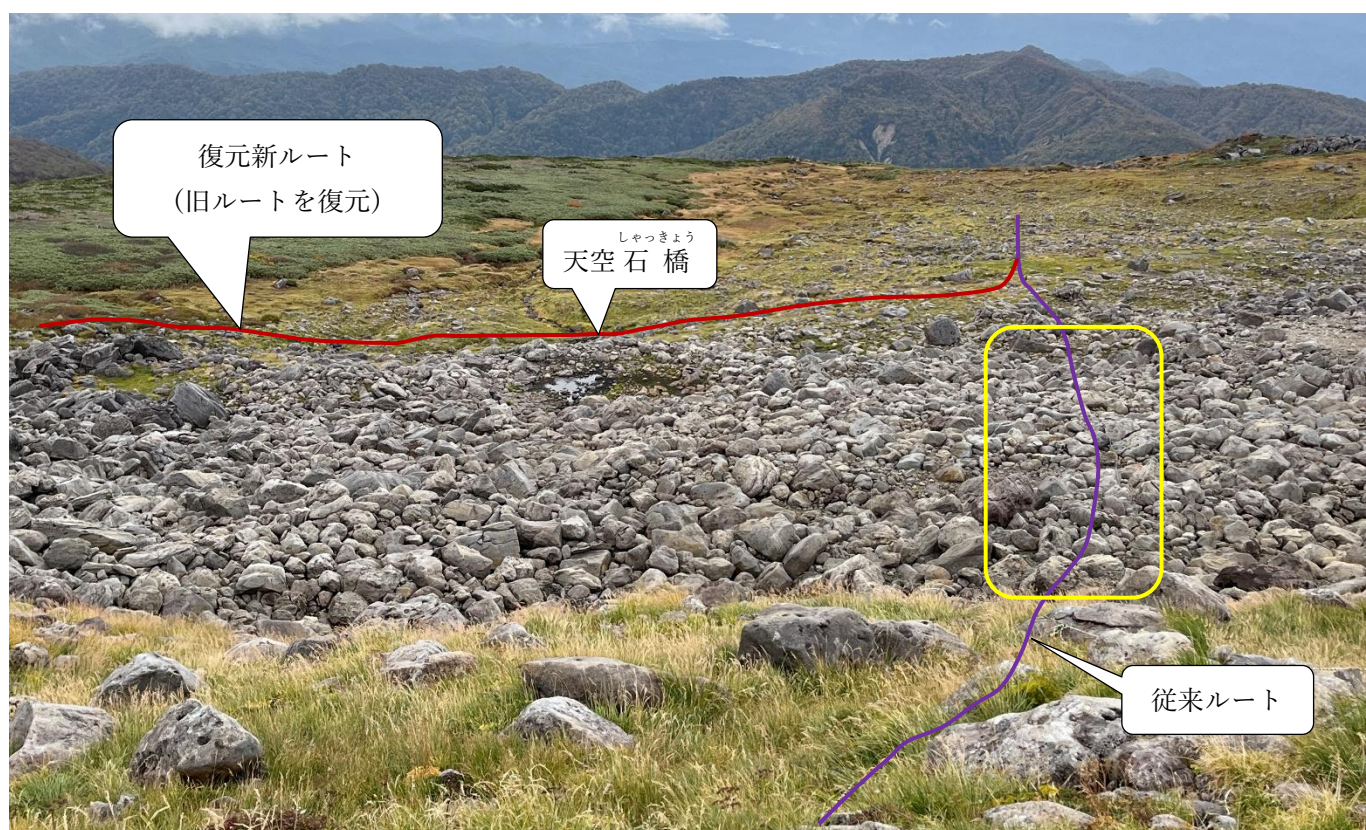


骨太尾根筋一直線古道の本通りにおいて、特に危険と見做される区間は次の2箇所であった。その危険回避と安全向上対策の実施状況を記述する。なお、対策以前のこれまでのルートに従来ルートと称する。

1. 「大雪城」^{おおゆきじろ}区間の旧道復元

以下の対策により、復元ルートにおいて、歩幅に大きな段差はほとんど無く、とても安全・快適に昇降出来るルートに変貌した。草花はほとんどなく、自然環境・自然植生を棄損することなく、埋もれている大きな岩体上の砂利道を歩くルートとなった。



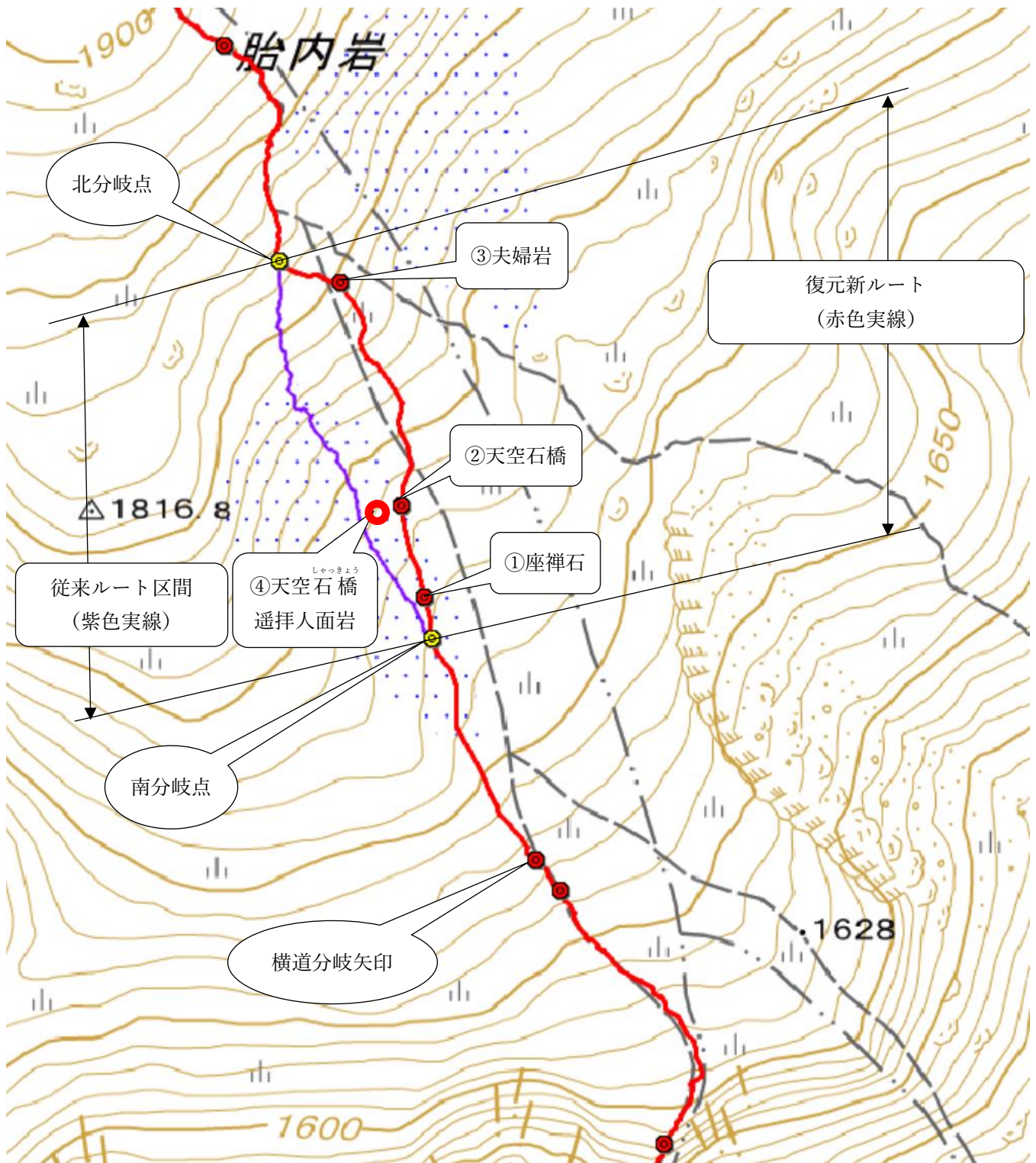
図－1

(a) 胎内岩直下に広がる「大雪城（万年雪）」が消えて行くと、図－1（北側から南側を眺望）の状況となり、1本のロープを^は這わせている従来ルート上に図－2のような大きな岩が表れる。中には鋭角的なものも露出する。これらを飛び跳ねるように渡って行く区間となり、融雪後は危険地帯に変化し、バランスを崩し易い場所となり、疲れ気味の場合などは特段の注意が必要となる区間であった。

現地（図－3）において、この従来ルートの安全対策を検討する中で、少し外れた所にケレン積み目印岩（大きな岩の上に小石を三角錐状に積み上げる）の点在と、国土地理院地形図上に、この従来ルートから少し東側にずれて旧道ルートがあることに気付いた。



図－2



図－3

(b) そこで宮林良幸と大沼香は、従来ルート上の危険地帯・悪路ルートを回避する観点に立ち、より安全に歩行出来る最適ルートを求めて、2022(R4)年9月10日(土)、2022(R4)年9月14日(火)～15日(水)の2回に渡ってはルートの調査・検討、その後の2022(R4)10月1日(土)、2022(R4)10月13日(木)の2回に渡ってはルートの確定と安全誘導ロープの引廻しを行った。

この度の安全誘導ロープを張った復元新ルートは、既存のケルン目印岩と古い踏み跡・道型を注視しながらのいわば旧道ルートの復元であり、新道開削ではない。

(c) この復元ルートには、図－4 a のとおり、結果して、平らな①座禅岩（南側からは二つの階段状の石を伝う）、標高約 1735m の高地に表れた②天空石橋^{しゃつきょう}、支え合い・寄り添う③夫婦岩の名所に出会うことになった。現世の私達がまさに拝みたくなるような、ある種異様なものの出現であるが、そこに長年存在していたものの気付かれなかったものへの照射で浮かび上がった自然からの置き土産である。



①



②



③

図－4 a

また、図－3 中④の位置に図－4 b のとおり
の「天空石橋遥拝人面岩」にも出会った。

言って見れば、これら①～④は、これらの新旧ルートを歩いた人達は目に入ったはずだが、**従来、名称付けが書面を以って公表・公開されていない物である。その上で、宮林と大沼がこの度再発見した物であること、物の存在場所をGPSで特定したこと、そして、このように書面を以って公表・公開する機会を踏まえて、発見者としての最適性の思慮を以ってT-FMOが名付けものである。**



図－4 b

(d) 区間距離の差異を計算すると、従来ルートは約 514m、復元ルートは約 527mで、13m ほど
^{ごくわずか}極僅長くなっただけである、ほとんど変わらないと言える。また、復元ルートはより東側に移動したことにより、より西側にある従来ルートよりは雪解け時の露出は早まることになることであろう。

(e) 分岐点（合流点）における方向表示について。図－5 a は北分岐点（上方）の所である。復元ルート安全誘導ロープには図－5 b のとおり「高清水通り 本道寺」と書いたテープを、図－5 c 南分岐点（下方）の所には「高清水通り 月山」と書いたテープを、それぞれに2枚巻き付けた。

(f) 南側の横道分岐から天空石橋付近までの国土地理院地形図上における従来ルートも眺めたが、確かに目印岩が点在しているものの一部は笹と背丈の低い灌木で藪化している所がある。

2. 「元高清水」背後エリアの旧道復元

次の問題意識を持って 2022(R4)年 11 月 12 日(土)探査した経緯は次のとおり。

- ✓ 1；平坦な「高清水小屋」背後地は裏鬼門に当るが、祭壇等の痕跡はないのか。
- ✓ 2；小屋を掛けた平坦地の西側は少し高くなっているが、西方はどんな眺めなのか。
- ✓ 3；九十六丁前の道は崩れていて本通り上で一番危険な個所であることから、安全ルート確保に何か手掛かりはないか。

特に3番目に着目しつつ以下に整理する。



図－5 a



図－5 b



図－5 c

(1) 現状の危険状態

図－6 は本通り下り、北を背に南方向を撮った写真である。本通りは本道寺から月山まで骨太尾根筋一直線古道である中で、この「古来の高清水（今でいう元高清水）」地点は、尾根（横）幅として 35m 弱の一番狭い場所であり、その両側は崖の状態になっている。特に北東側従来ルートは沢側に 3 m ほどがくんと落ちて、崖を巻く（へつる）状況にあり、本通り中最も危険な状態にあった。当該危険区間改良のための方策として、まずは、足元道筋を L 字状に掘削すれば済むではないか、ロープを張れば良いではないかという検討を行った。

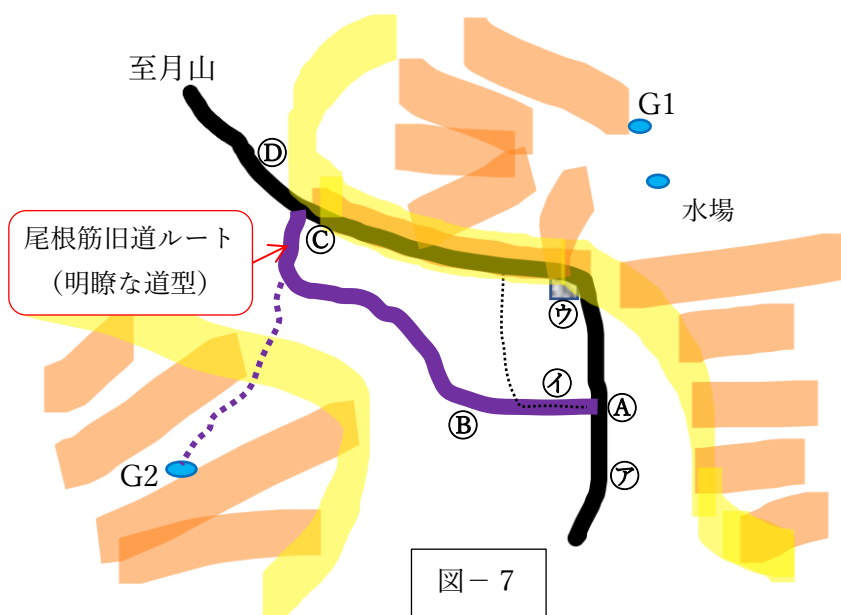


図－6

現地に行って見て分かることだが、斜度 30 度近い急斜面をへつるようになっており、それとても毎年雪で押され毎年の道普請を強いられる。また、両側に耐久的な太さの樹木はなく、ロープを張るには金杭などの打ち込みを要する。よって、効率的・効果的な方策ではなく思案中であり、来年道普請を計画中であった・・・。

（２）西側尾根に残る旧道の発見

場所・ルートは図－7 のとおり、2022(R4)年 11 月 12 日(土)、前記問題識解決に向けた行動において大沼が初めて発見したものである。平坦部背後地に上がって密生した濃い根曲り竹の藪の中を覗いて見たら、何と尾根の中央部に人工的に手を入れた U 字状の明瞭な道型（幅 2m 弱）に気付いた。しっかり踏み固められた状態にあり旧道であろうと直観した。図－8 は確証を得るために試験的に根曲り竹を刈り払って見た後の状況である。



引き続き、同年 11 月 26 日(土)に宮林と共にさらなる同行調査を行い、旧道ルートの確証を共通認識とし、笹竹刈払いを延長した。

（３）復元再整備

2023 (R5)年 6 月 26 日 (月)、阿部^剛と大沼は昨年復元したルートの再整備を図り、確実な登山道に仕上げた。なお、「九十六丁」(石) 前の従来ルートはさらに崩れたという状況で、足場(道型)は殆ど失われていた。状況写真は図(表)－9 のとおりで、この 60m 区間を完全開通させた。

以上の状況に鑑みて、旧道ルートの復元であり、新道開削ではない。

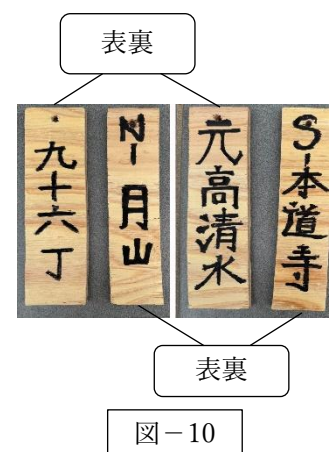
笹竹の刈払いを行ったが、道の中央部には樹木は生えておらず、それは、すなわち、長年に亘って歩かれ踏み固められたということの証左である。



図（表）－ 9

3, 「元高清水」環境整備

文化財的価値の高い九十六丁（石）、墓石2体、台座2基の保全、登山者に対する認知訴求、分岐点の道しるべとして、恒久的対策以前の現状即効対策として、その後、図－10のとおりの木札——図－7㊦㊧に「(表) N－月山、(裏) S－本道寺」の木札を、㊨に「(表) 元高清水、(裏) 九十六丁」を2024(R6)年11月4日（月）取付けた。



図－10

4. 「元高清水」背後地旧道廃道化の背景

(a) 高清水小屋守別当源養坊の栄枯盛衰も要因の一つであったものと想像する。山内志朗編「本道寺世代記考案(稿)」の資料と古来の「高清水」に眠る墓石に刻された年号を合わせて時系列を整理すると図(表)－11のとおりとなる。明治四(1871)年には復活したように見えるが、その後、神仏分離以降の連続した年代別の動静は不明であり、昭和十七(1942)の復職後の関係坊名には登場しない。文化七年から明治三年までの60年余りの間高清水別当は断絶したのであろうか。ただ、無住は60年間継続したとは書かれていない。なお、古来の「高清水」に眠る墓石に刻された年号や文政五年起点記念碑建立の年号を見ると、最初の源養坊無住となったのは文化七年の後であり、もちろん代役を置いた(現時点では確証を得る記録は見当らない。)ということであろうか。代役ということでは、姥像等石碑群内の祖母神像に刻字の梅本坊ではないかと想像する、それは、源養坊と同じ塔頭^{たっちゅう}の立場で隣同士であったことの理由による。

元和二	1616 年	源養坊が登場
		～(194 年間超)
文化七	1810 年	源養坊無住
文政三	1820 年	古来の「高清水」に眠る墓石に刻された年号
文政五	1822 年	九十六丁起点記念碑を建立
天保二	1831 年	古来の「高清水」に眠る墓石に刻された年号
明治三	1870 年	源養坊無住と明記(文化七年からは60年経過)
明治四	1871 年	源養坊を再開した?
図(表)－11		

ただし、これも同上資料によれば「・・・寛永十九(1642)年に西藏坊・源養坊が天海大僧正に出した口上書によれば、本道寺塔中は、地元派(西藏坊・源養坊)と宝蔵院派(泉識坊・宝蔵坊他)に分かれ、内部抗争があったことが伺われる。先に上げた資料で「双方」とあるのは、この地元派と宝蔵院派ということであろう。・・・」とある。先に上げた資料とは、西川町町史編集資料第八号(一)P18にあり図(表)－12に抜粋する。

(8) 本道寺より寺社奉行所 ^江 口上書 ・・・双方より源養坊・梅本坊参上仕願申候得ハ、・・・ 天和三年亥五月 (1683 年)
図(表)－12

また、明治四年以降に例えば坊は復活したにせよ、神仏分離のごたごたの中ですから、高清水別当の役職には就かなかったと想像する。図(表)－12において、対立双方について「源養坊・梅本坊」と併記しているから対立の当事者同士ということになる。そうすると、梅本坊は源養坊の職務を代理するか

(やらないだろう)ということにもなる。いずれにしても、ある一定期間、「元高清水」は廃止・閉鎖されたということが窺われる。しかし、同上資料には、毎年次、毎月、毎日の出来事を記述している訳ではなく、今となって過去の時空を100%復元出来ない以上は、いずれも断定することは不可というものである。関連資料旧本道寺地区の略図を図－13に掲載する。

(b) 合わせて、明治の神仏分離の混乱が大きな要因にあったものと直感する。神仏混淆・神仏習

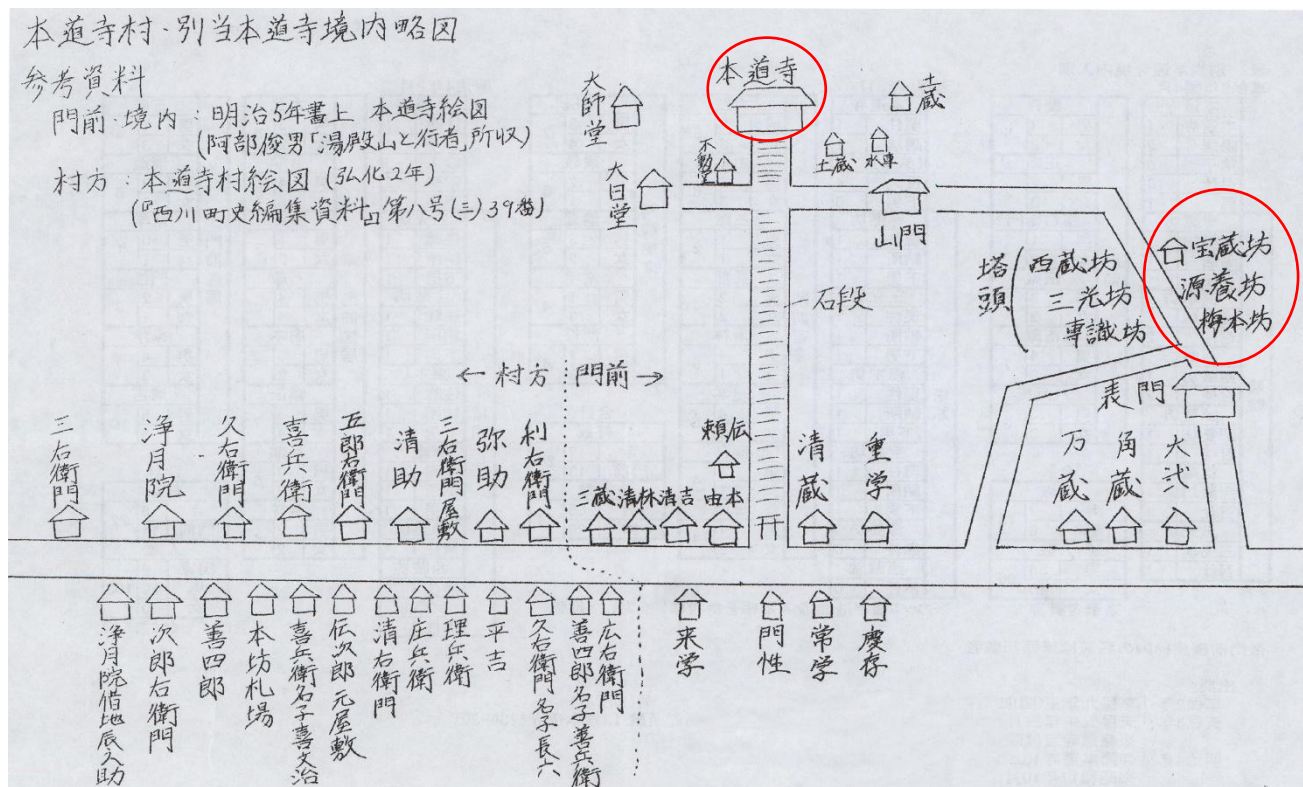
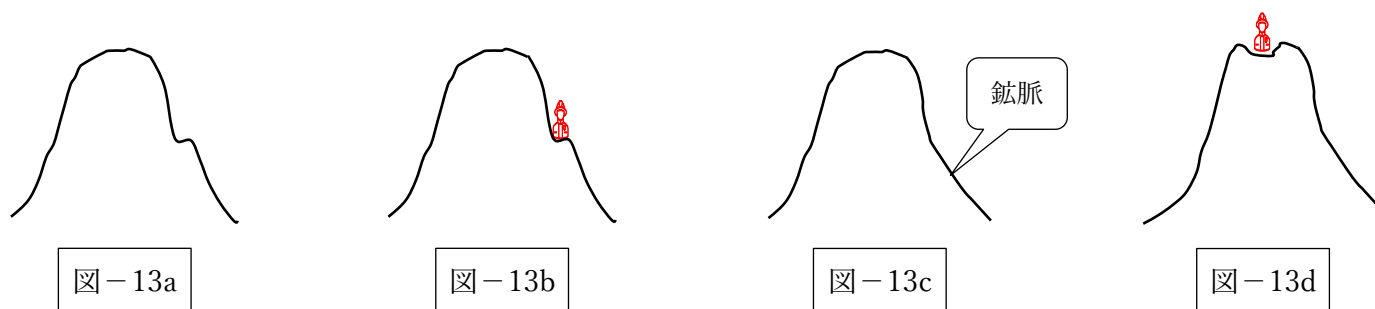


図-13

合・神仏一体があってこそその深い信仰と帰依の心が湧くものだ。強引な廃仏毀釈と神道化はその対象から魂を抜いたに等しいと思うのは当時の人達にとっては至極当然のことであつたろう、よって、信仰登拝に嫌気を指した人達が大勢表れて、本通りから三山に参詣登拝する人が激減し、小屋の営業も急速に衰退し、廃業に至ったものと想像している。したがって、当該地の山道は植生からして3年も経てば藪化するというのは容易に想像出来る。

(c) それではなぜ、危険な現在のルートが取られるようになったのかの理由を考えて見る。一時的な衰退期の後に、ピークハント志向の近代型登山に変わり、本通りにも往来復活の様相を呈し、登山者がこの地に来た時には旧道ルートが藪化していたことだろう。一方で、付近に残雪がある中でも、現道ルートの巻き道部分は、東側は沢筋で開放的なことから雪解けは早く、また、雪は沢側に引き摺られて地面が早く露出するだろうから、自ずとこちらを歩くようになったのではないかと想像する。

(d) 今着目している旧道廃道化の背景の一つに、前記とは異なる意見も出ている。今の様に崩れてはいなかったという視点で、往古の元々の道は現道ルートであつたという観方である。往古より図-13abの状態であつた。ある時期に付近一帯と共に道が崩落(図-13c)した、崩れた山肌に鉦脈が現れたことから山師が出入りした。そこで関係者以外立ち入らないように道の部分を閉鎖し、尾根筋に新たな道を開削したというストーリーである。



(end)